零明して、明旦、今夜の雨の音は云々、

〔日本書紀十三允恭〕八年二月、幸于藤原宮、密察衣通姫之消息、是夕衣通郎姫戀天皇而獨居、其不知天皇之臨而歌曰、和餓勢故餓、勾倍枳豫臂奈利、佐瑳餓泥能區茂能於虛奈比、虛豫比辭流辭毛、

〔日本書紀十三允恭〕二十三年三月、太子〔木梨輕〕恒念合大娘皇女、〔略〕中遂竊通、乃悒懷少息、因以歌之曰、〔略〕中去簿去曾、椰主區津娜布例、

〔釋日本紀二十六和歌〕去簿去曾〔中略〕私說曰、去簿如謂與倍、

〔厚顏抄中日本紀和歌略注〕私記ニ與倍古曾トハ、夜部コソナリ、日本紀ニ昨日昨夜ヲ、共ニキスト點ゼリ、萬葉第二云、君曾伎賊乃夜、夢所見鶴、此キソノ夜ハ、キスト同ジクシテ、昨夜ナレバ夜部也、キトコト通ズレバ、私記ノ說然ルベシ、

〔日本書紀五崇神〕七年八月己酉、三人共同夢而奏言、昨夜夢之有一貴人、

〔萬葉集抄四〕きそのよとは、きのふの夜といふなり、見日本紀、きのふのよとは、あけつる夜を云也、それをこよひと云は、うるしくは非說なり、けふのよをこよひとは云也、

〔日本書紀六垂仁〕八十八年七月戊午、卽日遣使者詔天日槍之曾孫清彥而令獻於是清彥被勅乃自捧神寶而獻之、〔略〕中皆藏於神府、然後開寶府而視之、小刀自失、則使問清彥曰、爾所獻刀子忽失矣、若至汝所乎、清彥答曰、昨夕刀子自然至於臣家、乃明旦失焉、天皇則惶之、且更勿覓、

〔土左日記〕九日、〔承平五年正月中略〕ふなこかぢとりはふなうたうたひて、なにともおもへらず、そのうたふうたは、〔略〕中よんべのうなねもがな、せにこはんそらごとをして、おぎのりわざをして、せにももてこず、おのれだにこず、

〔運歩色葉集與〕夜更夜深同

〔書言字考節用集二時候〕夜更又云深更　闌夕文選同　三更萬葉　更深仙遊　深夜又云良夜　深更